

## 1.1.4 教育内容・方法

### 1.1.4.1 カリキュラムの編成

#### <2003年度に設定した目標>

今後とも、カリキュラム研究委員会を中心に、時代の変化や学生の要請を考慮に入れてカリキュラム全般にわたっての検討を続けているが、将来に向けての目標は以下のようなものである。

#### 1. 言語教育科目の内容と授業形態の検討

英語関連科目の内容を見直し、学部所属英語契約教員（IEFL）の採用も視野に入れながら、コミュニケーション能力を向上させる英語教育の充実をはかる。

#### 2. キリスト教思想・文化コース関連科目の充実

全学に向けてMDSとしても提供している、キリスト教思想・文化関連科目を、より体系的に開講できるよう、兼任教員による授業も考慮に入れながら、充実を目指す。

#### 3. 全学とも連携した、ライフデザイン・プログラムの策定

キリスト教思想・文化コースの学生に関しては、全学で進められているライフデザイン・プログラムへの参加を積極的に促す。キリスト教神学・伝道者コースの学生に関しては、その特殊性から、神学部独自でライフデザイン・プログラムの提供を目指す。

#### 4. 単位認定制度の導入

ボランティアや教会での活動など、学生は、課外での活動を積極的に行っている。これらの活動を単位として認定するための指針を策定する。

#### 5. 大学院神学研究科との連携

さらに高度な職業人を育成するためのカリキュラムを、神学研究科との連携の下に作成する。

#### 6. セメスター制の充実

セメスター制の利点を生かすための週2コマ開講科目の見直しを含めたカリキュラムの充実をはかる。

### 【評価項目 6-1-1】 教育課程

- (必須要素) カリキュラムの編成方針と教育理念・目的との関係
- (必須要素) カリキュラムの体系性と教育理念・目的との関係
- (必須要素) カリキュラムにおける基礎教育、倫理性を培う教育の位置づけ
- (必須要素) 基礎教育と教養教育の実施・運営のための責任体制の確立とその実践状況
- (選択要素) グローバル化時代に対応させた教育、倫理性を培う教育、コミュニケーション能力等のスキルを涵養するための教育を実践している場合における、そうした教育の教養教育上の位置づけ
- (選択要素) 起業家的能力を涵養するための教育を実践している場合における、そうした教育の教育課程上の位置づけ
- (選択要素) 学生の心身の健康の保持・増進のための教育的配慮の状況

## （現状の説明）

神学部の教育目的は、キリスト教会で働く伝道者の育成である。この目的のためにカリキュラム編成が行われてきた。

しかし、近年、入学してくる学生の進路希望に変化が生じている。教会で働く伝道者以外にも、キリスト教主義学校における教師（主に、聖書科教師・宗教科教師、その他、英語・公民など）あるいは、病院・福祉施設でのチャプレン、クリスチャン・ワーカーなど幅広い分野で、キリスト教の奉仕者として働くことを希望する者も出てきている。また、一般企業に就職し、そこでキリスト者として働くことを希望する学生も出てきている。このような多角的方面への関心と進路希望が目立ってきていた。

一方、社会においては、「こころの時代」と言われ、宗教的・精神的な事柄に対する関心が高くなっている。ことに欧米の文化や思想を生み出し、西洋社会の思想的バックボーンとなってきたキリスト教を学びたいという求めは強くなっている。

このような学生のニーズや社会の要請に応えるために、神学部では、2004年にカリキュラムを改編し、創立以来の教育目標である、キリスト教全般にわたる基礎知識を有する専門的職業人を育成すると共に、広くまた専門的にキリスト教を学ぶことができるカリキュラムを編成した。これによって、キリスト教主義に基づいて広く社会に奉仕する人材を育成するという、神学部の教育目標の一層の実現に向けて努力している。

この改編に当たって、新たに、従来の伝道者育成のキリスト教神学・伝道者コース、新たなニーズに応えるキリスト教思想・文化コースという、2つの履修コースを設けた。その際、これまでバプテスマ（洗礼）を受けている者に限られていた受験資格を一部緩和し、キリスト教思想・文化コースへの受入を始めた。

授業科目は、基礎学力、ことに日本語と外国語（英語）におけるコミュニケーション能力の育成とキリスト教全般にわたる基礎知識の修得を目的に、学生の関心に合わせて深い学びを可能とするという考えに基づいて構成されている。従って、各専攻領域（キリスト教神学・伝道者コースおよびキリスト教思想・文化コース）の導入的授業は必修とし、それ以外の部分では選択の幅を大きく持たせてある。

学部開講の授業科目とその単位数は、キリスト教教育科目6単位、言語教育科目16単位、基礎教育科目8単位、専門基礎科目（キリスト教神学・伝道者コース：40単位、キリスト教思想・文化コース：36単位）、専門専攻科目（キリスト教神学・伝道者コース：34単位、キリスト教思想・文化コース：20単位）としている。

このほかに、自由履修枠を大幅に設けている（キリスト教神学・伝道者コース：20単位、キリスト教思想・文化コース：38単位）。これは、総合大学の中にある1学部であるメリットを生かし、学生個人個人の関心に合わせた幅広い学びを可能とするためである。これにより、複数分野専攻制（以下「MDS」という）やジョイント・ディグリー制度への参加が可能になるとともに、大学全体が用意する開かれた教育（インターンシップ、ボランティア活動など）への参加も可能となっている。

<卒業に必要な単位数>

キリスト教神学・伝道者コース 124単位

科目群	必修	コース必修	選択必修	選択	計
キリスト教教育科目	4単位	－	2単位	－	6単位
言語教育科目	8単位	－	8単位	－	16単位
基礎教育科目	8単位	－	－	－	8単位
専門基礎科目	32単位	*8単位	－	－	40単位
専門専攻科目	－	*18単位	4単位	12単位	34単位
自由履修科目	－	－	－	20単位	20単位
					124単位

\*キリスト教神学・伝道者コース必修科目

専門基礎科目：新約聖書ギリシャ語Ⅰ（4）、聖書ヒブル語Ⅰ（4）

専門専攻科目：今日の教会A（2）、今日の教会B（2）、今日の教会C（2）、今日の教会D（2）、牧会学概論（2）、礼拝学概論（2）、説教概論（2）、旧約聖書と説教（2）、新約聖書と説教（2）

キリスト教思想・文化コース 124単位

科目群	必修	コース必修	選択必修	選択	計
キリスト教教育科目	4単位	－	2単位	－	6単位
言語教育科目	8単位	－	8単位	－	16単位
基礎教育科目	8単位	－	－	－	8単位
専門基礎科目	32単位	*4単位	－	－	36単位
専門専攻科目	－	*4単位	4単位	12単位	20単位
自由履修科目	－	－	－	38単位	38単位
					124単位

\*キリスト教思想・文化コース必修科目

専門基礎科目：キリスト教と文化概論（4）

専門専攻科目：キリスト教と思想演習A（2）、キリスト教と思想演習B（2）

履修コースのうち、キリスト教神学・伝道者コースは、神学部の設立目的である教会に仕える伝道者の育成にある。神学部では、学部4年と大学院2年の6年一貫専門教育を目指している。学部レベルでは基本的専門教育を行い、大学院レベルでは、各学生の専門領域を決めて研究を進めることを目指して教育を行っている。

伝統的神学教育は、聖書学・宗教哲学・歴史神学・組織神学・キリスト教倫理学・説教学などであるが、近年具体的問題を扱う実践神学の分野への関心が高まっている。神学部ではこのような学生の希望に積極的に応えるために伝統的カリキュラムと実践神学が有機的に連携して、神学生の専門的知識と技術の習得に益するような努力を積み重ねている。

キリスト教思想・文化コースにおいても、キリスト教に関する基礎的知識を学習するために、1・2年次において両コースに共通の必修科目（専門基礎科目）を配置している。3

年次以降は、学生それぞれの関心にあわせて履修することができるカリキュラムとなっている。

人権教育については、キリスト教の基本精神とも合致するものであり、将来キリスト教の専門家として社会と教会に仕えるものとしての必修科目と認識して、キリスト教教育科目に「人権とキリスト教」を開講し、2単位を選択必修としている。また、全学で開講されている人権関係総合コースを積極的に履修するよう、指導している。

言語教育科目は、英語のみを必修科目として、第2外国語に関しては、全学で開講されているどの外国語も選択できるようにしている。英語に関しては、「リーディング」「ライティング」「リスニング」「総合」と授業の目的を明らかにし、履修者の学習目的をはっきりとさせるようにしている。コミュニケーション・ツールとしての英語も教育を充実させるため、「リスニング」「総合」に関しては、TESOL資格を持つネイティブ・スピーカーを非常勤講師として採用している。さらに、高いレベルの英語を求める学生には、大学全体で開講している英語のインテンシブ・コースの受講を勧めている。また、神学部では聖書学の研究に必修の聖書ヒブル語、新約聖書ギリシャ語、ラテン語、コプト語の古典語も専門基礎科目として開講しているが、これらの履修をもって第2外国語の単位に代えることができるようにしている。

教員免許状の取得について神学部では、宗教と公民が文部科学省の認定教科となっている。英語教員免許状取得を希望する学生は、他学部開講の科目を履修することで英語免許状の取得は可能である。

学期制については、 Semester制が定着している。途中で留学を希望する学生も出ており、3月と9月の卒業が可能になっている。

#### (点検・評価の結果)

2004年に編成されたカリキュラムは、現在2年目を迎えたところであり、概ね堅調に推移している。次の改編に向けて学生の学習状況を追跡調査し、準備はしなければならないが、現在のところ問題点は、次のようである。

キリスト教神学という学問の性質上、聖書学、歴史学、哲学などに関する基礎知識が要求されるため必修科目が多く、特に、導入的な授業が必修となっていること、また言語教育科目と基礎教育科目を週2コマ開講としていることから、1、2年次のカリキュラム編成がかなり難しくなっている。

これはまた、神学部のような少人数の組織においては、教員に相当の負担を強いる結果となっており、学内のキリスト教関係教員（各学部の宗教主事、宣教師）との協力や、非常勤講師の採用なども視野に入れて、授業担当を見直す必要がある。

現在、大学生として必要なリテラシー教育は、「基礎演習」科目によって行っているが、徐々に効果を上げつつある。その一方で、英語におけるコミュニケーション能力の育成と、将来外国語、ことに英語で書かれた専門書を読み、研究に利用する能力の育成という2つの目標をどのように調和させるかが、英語教育における問題点である。また、将来にわたって英語コミュニケーションを担当する教員を確保することも大きな課題である。

### (改善の具体的方策)

完成年度(2007年度)を目標に、現在のカリキュラムの見直しを進め、上に指摘したような問題点の改善に努める。また、英語教育の在り方を、自大学他学部の改革も参考にしながら検討する。

### 【評価項目 6-1-2】 履修科目の区分

- (必須要素) 専門教育的授業科目とその学部・学科等の理念・目的との関係
- (必須要素) 一般教養的授業科目の編成における「幅広く深い教養及び総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養」するための配慮の適切性
- (必須要素) 外国語科目の編成における学部・学科等の理念・目的の実現への配慮
- (必須要素) カリキュラム編成における、必修・選択の量的配分の適切性、妥当性

### (現状の説明)

2004年度入学生から、教育課程の改編を実施。履修コースに伴い授業科目を次の科目群にまとめた。

「キリスト教教育科目」、「言語教育科目」、「基礎教育科目」、「専門基礎科目」、「専門専攻科目」の5群に分け、コース共通の必修科目、選択必修科目、コース別の必修科目、選択科目等から構成されている。

「キリスト教教育科目」、「言語教育科目」、「基礎教育科目」は一般教養的授業科目としてコースに関係なく編成されている。

「専門基礎科目」は、コース共通部分と一部キリスト教神学・伝道者コース必修があり、キリスト教の専門的基礎知識を学習するための科目を配置している。「専門専攻科目」は両コース必修科目、選択必修科目、選択科目が配置され、学生の選択幅を大きく配慮している。

外国語科目は、「言語教育科目」として編成され、必修科目としての「英語」の他に選択必修としてドイツ語、キリスト教神学、思想・文化の学習に必要となる新約聖書ギリシヤ語、聖書ヒブル語、ラテン語、コプト語などの古典語を含めることを可能としている。

学生の興味関心を掘り起こし、主体的な学習が可能ないようにカリキュラムを編成し、学年配当を行っている。

### (点検・評価の結果)

現在のところ、新カリキュラムは2年目に入っているが、履修指導を十分に行っており、教養的な面でも配慮がなされている。学年進行に従って、学部の理念・目的・教育目標の実現に対する評価が問われることとなる。カリキュラム研究委員会での検証作業が必要となる。

### (改善の具体的方策)

教養的科目の位置づけ、体系化を検討し、専門領域につなげる必要がある。

### 【評価項目 6-1-3】 授業形態と単位の関係

- (必須要素) 各授業科目の特徴・内容や履修形態との関係における、その各々の授業科目の単位計算方法の妥当性

(必須要素) 教育課程の開設授業科目、卒業所要総単位に占める専門教育的授業科目・一般教養的授業科目・外国語科目等の量的配分とその適切性、妥当性

#### (現状の説明)

基礎教育科目では、基礎演習を軸に読む力、情報収集の技術、表現力・発表力の育成を目的としている。単位は春・秋学期各2単位。キリスト教は、キリスト教入門としてキリスト教の基礎的な知識の獲得が目的となっている。神学部入学生は必修科目であり、秋学期週2回の授業で4単位である。担当者も4人の専任教員が担当している。1・2年次で大学生としての基本的に身につけるべき内容を重点的に学習し、専門教育課程への繋ぎを確実にできるよう単位等が割り振られている。卒業単位124単位の学年別必修科目・選択必修科目の単位は、1年次28（キリスト教思想・文化コース）～34（キリスト教神学・伝道者コース）単位、2年次34～36単位、3年次10～14単位、4年次2～6単位、残りは選択科目・自由履修科目等で充たすことになる。

卒業所要総単位のうち言語教育科目16単位（共通）、一般教養的科目14単位（共通）、専門教育科目56単位（キリスト教思想・文化コース）、74単位（キリスト教神学・伝道者コース）と配分されている。

#### (点検・評価の結果)

授業の効果、学習者の習熟を考え、キリスト教教育科目、言語教育科目、専門基礎科目のコア的科目は週2回の授業を行って、4単位を付与している。週2回授業の行われる必修科目が多く、時間割が過密となっているため、学生にとっては若干厳しさを感じるであろうが、体系的に学習するには妥当な状態といえる。

ただ、問題は、少人数の教員組織であるため、負担が大きくなる傾向にある。

#### (改善の具体的方策)

新カリキュラムが導入されて、4年間は変更が難しいが、その間に生じる問題等については、これを集積し、次の改編時に活かして行く必要がある。

#### 【評価項目 6-1-4】 単位互換／単位認定等

(必須要素) 国内外の大学等との単位互換方法の適切性

(必須要素) 入学前の既修得単位の単位認定方法の適切性

(必須要素) 卒業所要総単位中、自大学・学部・学科等による認定単位数の割合

(選択要素) 海外の大学との交流協定の締結状況とそのカリキュラム上の位置づけ

#### (現状の説明)

学部で独自のものはなく、大学全体の交換留学、協定留学、認定留学に加わり、全学的な基準と方法に則って行っている。「Ⅱ 全学的な教育・研究に関する事項」の「2.4.1 カリキュラムの編成【評価項目 6-1-4】単位互換・単位認定等」の項を参照)

現在も、他大学・短期大学を卒業、あるいは一定の年限学んでおりながら、1年次から入学する学生があるが、入学前の既修得単位は、原則として認定していない。それは、神学部における専門教育を重要なものと位置付けているためであるが、同時に、早期卒業な

どの制度が整っていないために、認定したとしても修業年限を短縮することができないためである。

神学部以外の開講科目については、卒業所要総単位数124単位のうち自由履修枠（キリスト教神学・伝道者コース：20単位、キリスト教思想・文化コース：38単位）を設けて、多様な科目の認定を可能にしている。3年次編入学の入学前単位については、履修科目の内容を勘案しながら62単位を上限として、卒業所要総単位数である124単位に、可能な限り算入している。

（点検・評価の結果）

国内外の大学等との単位互換については、大学全体の中で適切に行われている。

入学前単位の認定は、早期卒業の制度が整わない限り難しい。

（改善の具体的方策）

飛び級など、神学研究科との連携検討と並行して、入学前単位の認定を検討する。

【評価項目 6-1-5】 開設授業科目における専・兼比率等

（必須要素）全授業科目中、専任教員が担当する授業科目とその割合

（必須要素）兼任教員等のカリキュラムへの関与の状況

（現状の説明）

全授業科目中、専任教員が担当する授業科目とその割合は次のとおりである。

（2005年5月現在）

	専任担当科目数	全開講授業科目数	比率(%)
専門基礎科目	9	10	90.0%
専門専攻科目	20	25	80.0%
キリスト教教育科目	0	1	0.0%
言語教育科目	2	4	50.0%
基礎教育科目	2	4	50.0%

専門基礎科目、専門専攻科目のうち必修科目については、すべて専任教員で担当している。その他選択科目などにおいても、カリキュラム上重要と考えられるものは、専任教員が担当するようにしている。

（点検・評価の結果）

カリキュラム上重要な部分を専任教員が担当するのは当然であるが、専任教員の負担が大きい。

（改善の具体的方策）

選択科目について、カリキュラムにおける重要度を整理していく。さらに、従来以上に、学内キリスト教関係の専任教員（学部宗教主事、宣教師など）の協力を仰ぎながら開講できないか検討を行う。

**【評価項目 6-1-6】 カリキュラムと国家試験**

(選択要素) 国家試験につながるのあるカリキュラムを持つ学部・学科における、受験率・合格者数・合格率

**【評価項目 6-1-7】 インターンシップ、ボランティア**

(選択要素) インターンシップを導入している学部・学科等における、そうしたシステムの実施の適切性

(選択要素) ボランティア活動を単位認定している学部・学科等における、そうしたシステムの実施の適切性

(現状の説明)

厳密な意味でのインターンシップではないが、ことにキリスト教神学・伝道者コースの学生は、伝統的に教会や関係団体での活動を行っている。専任教員は、毎年度出席教会について把握し、活動について面談を行っている。

(点検・評価の結果)

教会、またキリスト教関係団体におけるボランティアを単位として認定したり、専門職に就くためのインターンシップとして積極的に位置付ける必要がある。

(改善の具体的方策)

単位認定に向けて、認定のための要件などを検討し、次の改編時にはカリキュラムの中に位置付ける。

**【評価項目 6-1-8】 生涯学習への対応**

(必須要素) 生涯学習への対応とそのための措置の適切性、妥当性

(現状の説明)

聴講生や科目等履修生の受け入れ制度によって、生涯学習の道が開かれており、多くの聴講生・科目等履修生が学んでいる。

<聴講生の割合(各年度5月1日現在)>

	聴講生計	左のうち、学部卒以上	左記以外	正規学生計	割合
2005年度	15名	11名	4名	116名	12.9%
2004年度	26名	18名	8名	113名	23.0%
2003年度	14名	9名	5名	106名	13.2%
2002年度	21名	14名	7名	106名	19.8%
2001年度	20名	18名	2名	96名	20.8%

\* 2005年度には、高大連携聴講生1名を含む。

<科目等履修生の割合（各年度5月1日現在）>

	科目等履修生計	左のうち、 学部卒以上	左記以外	正 規 学生計	割 合
2005年度	15名	14名	1名	116名	12.9%
2004年度	9名	8名	1名	113名	8.0%
2003年度	3名	3名	0名	106名	2.8%
2002年度	5名	5名	0名	106名	4.7%
2001年度	5名	5名	0名	96名	5.2%

\* 教育職員免許状取得のための科目等履修生を含む。

\* 科目等履修生（一般）は2004年度より募集。

受け入れは毎年度春学期および秋学期に行っている。しかしながら、教室の収容能力や設備上の制約から、聴講生については、必修科目の履修に制限を加えざるを得ない状況にある。

出願者については、授業科目担当者または教務主任が面接を行い、受講希望理由や目的を確認している。聴講生については、いわゆる高等学校卒業ではない者も、面接や各書類をもとに資格認定を行い、受け入れを行ったケースもある。また年代も20代から80代まで幅広く、牧師や自営業者など社会人として活躍している者の他、主婦や企業退職者なども多い。

科目等履修の目的として、将来神学部に編入を計画している者も存在する一方で、必ずしも学位取得を考えていない者も多い。

（点検・評価の結果）

聴講生を多く受け入れる一方で、正規学生における必修科目の聴講に制限を加えている点は改善されなければならない。事実、ニーズが高いのは、神学入門的な科目（必修科目）の聴講である。結果、単位取得の必要がないのに、必修科目の受講に制限のない科目等履修生に登録するケースも存在しているのではないかと考えられる。

上記改善点は見られるものの、生涯学習に取り組もうとする姿勢は概ね評価できる。しかしながら、さらにエクステンションなどにおいてキリスト教の基礎知識を学習できる機会を設けることも検討しなければならない。これはキリスト教会においても一般社会においてもニーズがあると考えられる。

（改善の具体的方策）

施設・設備の状況、授業運営における聴講生と科目等履修生の影響を勘案しながら、まずは聴講科目制限に関する見直しを検討する。

キリスト教の基礎知識を学習できる機会について、そのあり方を検討し、実現の可否について判断する。

【評価項目 6-1-9】 正課外教育（エクステンション等）

（選択要素）正課外教育の充実度

#### (現状の説明)

神学部学生の中には、教会での働き、病院でのボランティア活動、ホームレスの人達への食事ボランティアや夜回りなどのボランティアに積極的に参加している者がいる。これらの活動は、キリスト教が社会と関わる中で生まれてきたもので、キリスト教を背景とする神学部や神学部学生ならではのものであると考えられる。

ことに、教会における活動は、将来、キリスト教の伝道者となることを志望する学生にとっては必須のものであり、これまでも、教会への定期的な出席と積極的な活動を指導してきた。

#### (点検・評価の結果)

これまでは、上記のような教会での活動、社会でのボランティア活動を、いわば当然のものとして行うよう指導し、学生もそのように考えてきたが、インターンシップやボランティアの単位化という、大学を取り巻く環境の変化にあわせて、これらを単位として認定するための検討が求められている。

#### (改善の具体的方策)

次のカリキュラム改編時に、教会・社会での活動を単位として認定し、カリキュラムに位置付けるため、その要件などを検討する。

### 1.1.4.2 教育・研究指導のあり方

#### <2003年度に設定した目標>

今後とも、カリキュラム研究委員会を中心に、時代の変化や学生の要請を考慮に入れて、履修指導や研究指導に関して検討を続けていく。将来に向けての目標は以下のようである。

#### 1. 履修指導体制を強化する

カリキュラム編成によって、自由履修枠など学生の関心に基づいた履修が可能となっている部分が多くあるので、系統的計画的に履修できるよう、助言の体制を整える。

#### 2. 分野別研究演習によって研究への関心を深める

3年次より履修が可能になる分野別研究演習によって、専任教員の研究に触れるとともに、それによってより深い研究への関心を高めるように指導する。

#### 【評価項目 6-2-1】カリキュラムにおける高・大接続

(必須要素) 学生が後期中等教育から高等教育へ円滑に移行するために必要な導入教育の実施状況

#### (現状の説明)

高等学校教育との接続を意図して、文章を読み・書く、また研究に必要な情報を収集・